

# お寺の社会性

## 生臭坊主のつぶやき

### 五

#### 竹中尚文

##### はじめに

三回続けてお葬式の話を書いた。「弔」は葬儀屋さんの立場から、「参」は人のつながりにのながにある葬儀を、前回の「四」は僧侶の立場から書いた。ここは私が一番書き込みたいところであるが、宗派色が色濃く出るころなので別の機会にしたい。

このまま葬儀の話しばかり書き続けば「葬式坊主のつぶやき」になってしまう。今回でお葬式の話を終えよう。併せて、初回に御布施の定額化という話題について私の思いを申し上げたい。

##### 1. 葬式坊主

日本の中世仏教史の専門家である松尾剛次氏によると、中世日本では、僧侶を分類すると「官僧」と「遁世僧」に分かれる。官僧とは、国家に仕える官僚としての僧である。鎌倉時代にこの官僚の身分を離脱する僧が出てきた。この僧たちを「遁世僧」と呼んだ。鎌倉新仏教を興し担い手になっていったのも「遁世僧」である。また、葬儀を始めるようになったのも「遁世僧」である。それまで以前は、死んだ人や死にそうになった人は、道や溝に捨てられた。これは死を忌む(斎む)べき事だと考えた日本人の宗教観によるものである。

官僧は葬儀に関わらない。例えば、現代も法隆寺の僧は葬儀を執り行わない。彼らは、官僧の流れをくむ僧である。また、官僧でなくても祈祷を主な仏事とする僧も葬儀に関わらない。「遁世僧」の中でも「葬式坊主」と「祈祷坊主」に分かれた。

鎌倉時代以降、葬儀に関わるようになった僧は黒衣や墨袈裟を使うようになった。タイやスリランカの坊さんがオレンジ、台湾や韓国の坊さんがグレーの僧衣を身にまとう。日本の坊さんの僧衣が黒であるのは、その意味と歴史がある。最近、黒の僧衣が暗いイメージだから、他の色にしようと言う動きがある。愚かな考えである。

## 2.同じ葬式はない

これまで書いたお葬式の話について、これらは特殊なケースだと言う印象を持たれた方もいるかもしれない。特殊なお葬式と思う人は、普通のお葬式というものが頭にあるに違いない。ところ

が、普通のお葬式というようなものはない。同時に間違ったお葬式もない。間違った人生がないように。

前に登場した葬儀屋さんの藤原さんと「普通の葬式ってないよなあ。みんな違うよなあ」とよく話したものである。亡くなる人はみんな様々だ。また、人は同じ条件で亡くなるのではない。同じ葬式なんてあるはずがない。ところが、よく親戚とかで、「葬式というのは、こんなふうにしなくてはならない」と指南を始める人に出くわすことがある。たいていは迷惑な人である。最近の葬祭業者は、以前と比べてずっとシステム化されていて、何をどうするかを教えてくれる。但し、そこで喪主がどうしたいのかを言わないとすべてが業者のペースになってしまう。画一化した儀式になってしまう。

ここで、坊さんの御布施は画一化したものではないのか問いがある。この御布施の問題は、「生臭坊主のつぶやき」の第一回目に

ふれた話しである。御布施の金額を明示すべきか否かという話しである。私は明示して欲しくはないし、問われても答えないし、御布施の金額は定額ではないと思っている。その結果、私が葬儀でいただく御布施の金額は一定ではない。お互いによく知っている人だから、これだけの金額を渡せば充分だろうという表情で渡されることのないのがありがたい。

### 3.葬儀の依頼

私は初対面の方のお葬式を、皆無とは言わないがほとんどしない。亡くなった方も遺族も、初対面のケースばかりであったなら、私は御布施の金額も明示すべきだと言うかもしれないが、今はその状況はない。

お葬式の依頼はいろいろである。もちろん誰かが亡くなって依頼の電話がかかってくるのだが、それがすべてではない。

夏の昼下がりに電話が鳴った。おばあちゃんが亡くなったと言う知らせだった。お孫さんからだ

った。私は、少したじろいだ。

なぜなら、かつてこんな話しがあったからだ。そのお宅の祥月命日にお参りをした。たまたま、その日はおばあちゃんが一人で居た。仏壇に向かってお経をあげて、少し世間話をして帰ろうと思っていた。少しの話が、おばあちゃんが淡々と語り出した。

新婚で旧満州に渡った。子供が生まれてすぐに終戦を迎えた。ご主人は彼女が子供を連れて先に帰国するようにと、ご主人の実家の住所を渡してくれた。朝鮮半島を貨物列車で南下する間に、赤ちゃんが自分の腕の中で息絶えた。息絶えた赤ちゃんを数日間抱き続けた。帰国して自分の実家は空襲で焼けていた。渡された住所を頼りにご主人の実家に行くことにした。ローカル線の駅で降りて、人に道を尋ねながら数キロ先の村にたどり着いた。村の小さなお堂の縁に腰をかけて迷った。主人の消息どころか生死も不明である。赤ちゃんも死んでしまった。息子の安否すら分からないのに、

両親は自分を迎えてくれるだろうかと。通りかかった村人が声をかけてくれて、その家に連れて行ってくれた。両親は喜んで、よく帰ったと迎えてくれた。抑留されたご主人が帰国するまで、自分を大切にしてくれた。ご主人が帰国した時、自分は朝鮮半島で赤ちゃんを亡くしてからずっと生理が止まったままだった。子供ができないから同じ村から養子夫婦を迎えた。人のいい夫婦だった。暫くして、自分に生理が始まって、娘が生まれた。娘も嫁いで幸せに暮らしているようだ。連れ添ったご主人は少し前に亡くなった。

話を聞いていて、おばあちゃんは自分の葬式を私に頼んでいるのだと思った。人生は絶望の淵を歩むこともある。たまたま行き交う人の善意に救われることもある。そんな人生を終えるときに、

いろいろあったね、ごくろうさま言ってあげたい。私もそんな言葉を掛けてもらえる人生を送りたい。

私の髪を切ってくれる美容院の店主は息子さんに「私が死んだら、このお寺に電話して」と言っているそうだ。彼女は私より若い。でも、このような頼まれ方は嬉しい。坊さんとは死んでからの付き合いではなく、生きている内から仲良く付き合ってもらいたい。

#### 訂正

前号が発行されて直ぐに真宗学の先生からメールをもらった。(『対人援助学マガジン』Vol.2 No.2)の P.139 右段の下から 6 行目に「供会一処」と書いた。正しくは「俱会一処」である。